

---

# 文藝部 夏号 風鈴

Chaco

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

文藝部 夏号 風鈴

### 【Zマーク】

N4511M

### 【作者名】

Chaco

### 【あらすじ】

登場人物の名前は、ご自由にどうぞ。

(前書き)

文藝部 夏号 風鈴  
ですね( )

ちりりん。風鈴が涼しげな音を立てて鳴った。

「んで、今日はいつまで粘るんですか？」

僕が聞くと、縁側に座っていた彼女は首をぐるりと回して壁にかけてある時計を見た。

「う～んっ。もうＰＭ・９・００か。でももうひょいっと粘らつかな  
もらえません？」

？」

そういうと手に持っていたアイスキャンディーを一口食べた。

「く～っ！冷てえ～。やっぱガソガソ君はうめえ～！」

「もう。いい加減、毎日うちに通つてアイス食い散らかすの止めて  
もらえません？」

「ありますけど……？」

すると彼女は自分の腕時計を見てから言った。

「今はPM・7：00だから……。お兄さんが帰ってくるまで少し待たせてもらえる？ どうしても直で言わなきゃいけないことがあるんだよね。」

「そんなの大学で言つてくださいよ。」

「学部が違うからなかなか会えなくて……。」

「何か待ち合わせとかすればいいじゃないですか？」

「だつて彼、忙しいじゃん？」

確かに兄は忙しかった。昼間は大学に通つて夜はバイト。自由時間なんてほとんどない。

「といつことで！」

彼女はわざと靴を脱いで綺麗に並べた。

「おじやましまあ～す！」

結局その日に兄が帰ってきたのは深夜で、彼女の帰った後だった。同じようなことが一週間程続いていた。彼女はやがてうちが自分の家であるかのように振る舞い、うちのアイスを食い散らかすようになった。

「暑う～いっ！」

彼女はそう言って着ていた半袖のパーカーを脱いだ。そこで僕は回想から引き戻された。そしてふと彼女に目線を戻した。すると暗がりの中に、ノースリーブのシャツから出ている彼女の滑らかな肩の曲線が見えて、僕は一瞬ドキッとした。

「ぼく、喉渴いたから麦茶でもちょうどいい。」

彼女は僕のことを“ぼく”と呼ぶ。僕はもう中学生なのに、彼女には子供にしか見えないのだろう。少し、少しだけ寂しい。

「はいはい。ここを誰のうちだと思つてゐるんですか……？」

「もちろん、私の領土さつ！」

「はいはいそうですね、地主さん。」

僕はそんなことを言いながら麦茶を汲んで運んできた。

「おつーサンキウっ！」

彼女は、ショートパンツから伸びたすらりとした細長い足をぶらぶらさせながら麦茶をぐびぐびと飲み干した。

「お兄さん、いつ帰つてくるかね？」

「さあ？ 相当バイトが忙しいみたいですよ？」

「一週間もぶつ 続けて遅くまで働いてて大丈夫なの？」

彼女の心配そうな声色に少し複雑な気持ちになつた。

「結構疲れがきてるみたいです。」

「そりやそうだよね……。」

そこで彼女は少し考え込んだ。

「でもさ、何でそこまでやるの？」

「……」

僕は少したためらつてから言った。

「うち、最近父がいなくなつたんです。それで母のパートだけじゃ家計のやりくりが難しくなつて、兄もバイトを増やしたんです。僕はまだ中学生だから何もできなくて……。」

「……大変なんだね……。」

「……」

「ただいま。……！」

やつとPM・9・30を過ぎたころ兄が帰つてきた。

「あつ、兄さん。この前言つた、大学のお友達が来てるよ~？」

「……お前だったのか？」

兄は僕の話など聞こえないようだつた。ただ彼女のことじつと睨んでいた。それは誰が見ても異様な光景だつた。

「やつと会えたね。一週間通つたかいがあつたよ。」

最初に張り詰めた空氣を破つたのは彼女だつた。彼女からはさつきまでの優しい笑顔が消えていた。唇の端をあげて笑つてはいる彼女の顔は恐ろしかつた。

「ちょっと来い。」

兄は彼女の腕をむんずと掴み、家を出て行つた。窓から見ると近くの公園に向かう二人の姿が見えた。

一人は30分たつても一時間たつても戻つてこなかつた。僕はさすがに心配になつて公園へ行つてみた。

「兄さん……。兄さん？」

この公園は木が多くて一人はなかなか見つからなかつた。しばらく歩いていると一人を見つけた。

「…………」

兄は彼女に殴りかかつていた。彼女の唇の端から血が滲み出でていた。

「兄さんっ！…………」

僕は駆け寄つて兄の腕を全力で引っ張つた。

「ぼく、いいトコで来たね。」

彼女は腕で口を拭つて言った。

「ねえ、知つてる？あんたの親父がいなくなつたのはあんたのせいなんだよ？」

「てめえっ！」

僕の力が緩んだのを見計らつて兄は彼女を思いつきり殴つた。彼女の身体がぐらりと揺れて地面に倒れた。

「兄さん、止めてよ！僕、知つてるよ？」

家に帰つて、僕は兄に全てを聞いた。兄と彼女は合コンで出会つてつい最近まで付き合つていた。兄は彼女になら何でも話していた。しかし父がいなくなつてうちの家計は苦しくなり、兄は忙しくなつた。そこで兄は彼女に別れを告げたのだ。兄と歳がかなり離れていた僕はそんなこと全く知らなかつた。けれど彼女は諦められなかつた。そこで彼女は兄を脅してよりを戻そうとしたのだ。

『私とよりを戻さないと、あんたの弟に“あんたの親父がいなくなつたのはあんたのせいなんだよ？”って言っちゃうよ……？』  
と言つて……。しかし僕はそんなこと知つていた。僕は父の子じやない。父はそれを最近知り、ショックを受けて出て行つたのだ。

「兄さんもバカだな……。」

そんなこと知つていたのに。僕はもう子供じゃないのに。僕はちらりと兄の部屋のドアを見た。彼女は兄に殴られて軽い脳震盪を起こしたらしく、気絶してしまつたので僕と兄とでうちまで運んできて兄の部屋で寝かせている。兄は今近くのコンビニまで買い物に行つていて。ふいに彼女のことが心配になつてそつとドアノブに手をかけた。ガチャ。彼女は気がついたのかベッドに腰掛けていた。そして手にはきらりと光るものを持っていた。彼女の手首からほどす黒い液体が滲み出していた。僕はとっさに彼女が持つていたナイフを奪い取つた。

「ごめんね、ぼく。だめだね私つて。」

そう言つて彼女は顔を覆つた。

「私、あの人がないと生きていけない。でも勇気がなくて死ぬことも出来ない。」

僕は話を聞きながらぎこちない手つきで彼女の腕を縛つて止血をし

た。

「ねえぼく、いつそのこと君が私を殺してくれないかな？」

彼女は優しく微笑んだ。僕はその笑顔が愛しくてたまらなくなつた。

「分かりました。目を瞑つてください。」

彼女は恐る恐る目を閉じた。僕はナイフを近くの机においた。そして一度だけ彼女を、強く…強く抱擁した。彼女は驚き、ゆっくりと眼を開けた。

「あなたは兄がいなくとも生きていける。兄はあなたの全てじゃない。これからだつて、兄よりもずっとずっと深くあなたを愛してくれる人が出てくるかもしれない。」

彼女の瞳に涙があふれた。

(後書き)

文藝部 夏号  
ですね ( ) 風鈴

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4511m/>

---

文藝部 夏号 風鈴

2010年10月16日13時29分発行